

軌跡

利尻富士町立鴛泊中学校 一年 西島 一樹

北海道がどのくらい大きいか、どんな道があるか想像したことがありますか。

私は、小学一年の夏休みに自転車で稚内港から、宗谷岬まで二十七キロメートルを走った。十六インチの小さな自転車だった。二日間をかけて宗谷岬に着いた時、北海道がどのくらい大きいのか、この先にどんな道があるのか、自分の力で走って確かめてみたいと思った。帰り道、母が

「毎年走りつないでいけば、いつかは北海道一周できるよ。」

と提案したので「確かにその通りだ」と思い、自転車で北海道一周することを決意した。

地図を見て計算すると、北海道の海岸線の道路は、二三〇〇キロメートルで、夏休みや、春休み、五月の大型連休を使えば、小学校の六年間で一周できそうな気がした。

翌年、小学二年の五月。前回走った宗谷岬まで自転車を車で運び、北海道一周自転車の旅が再開した。父と母が交代で電動アシスト付き自転車と車で伴走して一緒に走り、夕方たどりついたところで宿を探したり、車中泊をしながら進んだ。

低学年の時は、走ることも遊びが中心で、海や公園でたくさん遊び、図書館に寄ったりして一日に十六キロメートルほどしか走れなかった。しかし、高学年になると体力がつき、自転車も大きくなり、一日に七十キロメートル進む日もあったので、両親ともについてこられなくなり、ひとりで行ける日が増えた。単独で走ると、景色に目が向くようになり、より真剣に地図を見るようになった。

地図には峠と書かれていないのに、きつい上り坂が続く。カーブを越えた先に突然現れる上り坂。思わず

「これは地図に書いてないぞ。」

と叫ぶことが何度もあった。『悪魔の坂道』や『旅神様峠』と名前をつけ、気分がよい道を軽快に走っている時は『一直線が始まるよ』や『見つけちゃった近道』という歌を自作して歌いながら進んだ。

旅は一期一会だ。網走、羅臼、厚岸では、快く長期間自転車を預かってくださる人

に出会えた。すれ違ふオートバイや自転車の人たちが手を振って応援してくれたり、冷たい飲み物やアイスクリームを差し入れてくれ、励まされた。たくさんの人たちと出会い、旅の話をし、握手をして別れた。

気温が三十度を超える日も、雪が舞う寒い日も、向かい風もトンネルも、私は走り続けた。車の中で父と母がけんかをしていても、黙々と突き進んだ。斜里町のまっすぐな道、五時間自転車を押して歩いた知床峠、桜並木の中を走り抜けた豊浦町の下り坂、青い海が広がるせたな町の道。

記憶の中に北海道の風景がたくさん刻まれ、ついに六年生の夏休み、稚内港に着して旅は終わった。成長に合わせて乗り換えた自転車は全部で四台、十四回にわたる長い長い北海道一周だった。

飛行機に乗って、空の上から北海道の大地を眺めると「あの海岸線を全部自転車で走ったんだな」と実感する。北海道の海岸線は二三〇〇キロメートルで、その景色と思えば一本の道としてつながった。

波の音、鳥の声、肌で感じた風。出会った人たち。これまで走ってきた道を、私はずっと忘れない。